

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

1	オランダでもっともうまいもの	2
2	ゴッホとの対話	3
3	フランケン・ダッチマン	5
4	無駄ということ	7
5	棚からデーニッシュ	10
6	マジンガーゼットと英国紳士	13
7	女が20代後半でやるべきこと	16
8	レンブラントとブラックジャック	19
9	優等生の天才	20
10	デーヴェンター	21
11	紀貫之の教え	23
12	オランダ人とピンク	24
13	何ゆえに英語か?	25
14	時代ということ (ソニーとオランダ)	27

1 オランダでもっとも美味しいもの

何といってもオランダでもっとも美味しいものはビールである。どうしてかは判らないが、とにかく美味しい。30数年の人生の中で、一杯のビールでここまで感動したという経験は数少ない。10年以上前にミュンヘンで飲んだビールの味はあまり記憶にないので、ドイツと比較はできない。が、オランダのビールの美味さは格別である。

実は、今となっては、私はアルコールがほとんど飲めない？体である。不健康なのではなく、ビールを飲むと体に痛みが出てきたり、足にじっとり不快な汗をかいたり、苦味ばかり強く感じて飲むことができないのだ。ミラノでは、ストレスからたまに1本飲もうと栓を抜いても、1本飲みきるのはほとんど不可能に近かった。

しかし、今回のオランダ旅行は同行者が26歳と血気盛んで若いこともあり、移動距離も多く歩き回ったため、疲れきってしまい、思わずレストランでビールを頼んだ。瓶入りのホワイトビールだったが、これが美味しい。滑らかな泡、豊かな香り、すっきりとした喉越し・・・

冷えていなかったのも丁度良かった。麦の味がしっかりとして、薬臭さや嫌味がなかった。

ユースホステルで飲んだハイネケンもコクがあって美味しかった。冷えているビールは最初の泡だけをすすり、常温に近づけながら、徐々に飲んでいくのがコツで、時間が経つにつれて、より深い味わいになってくる。

これほどビールが美味しい理由の一つには水がいいことが上げられる。オランダは水を濾過する技術に優れており、水道水もほとんど飲めるようである。まことに、水質が酒類に及ぼす影響は大である。日本でも水質にこだわるビールは多々あるが、これほどのインパクトはない。

してみると麦、モルトだろうか？ここは水面の方が地面よりも高い。土壌には海のミネラルが多く浸透しているのだろうか。

さらにビンビールが主流であり、カン派は少数派である。さらに泡の感じから上面発酵のものが多。してみると、発酵・保存技術がいいのだろうかと思いカン・ビン共に飲み比べたが、どちらも遜色なく美味しい。

ジュネーバというジンアルコール度数が高いので飲まなかった。試してみたら、ビールがこんなに美味しい理由が、何か判ったかもしれない。

旅行中ビールをかなり飲んでしたが、夜中に体調が悪くなることもなく、内臓、四肢に影響が出なかった。してみると、オリーブがイタリア人に必要不可欠なように、ビールは海の民ダッチマンに不可欠な自然の恵みなのかもしれない。

2 ゴッホとの対話

「ああ、二回目じゃないか？」

「まったく、こんなところで会えるとは思わなかったよ。」

「相変わらず、いい青だなあ、こんなに黄色味がかっていたっけ？」

「よく見てくれよ、濃い部分もちゃんとあるんだから。」

「うわ、ほんとだ！・・・しかし、すごいなあ、ホントに、同じトーンの青は全く使っていない・・・全部が微妙に違う青になってる。」

「わかるか？」

「そりゃあ、わかるよ、うん、わかる・・・それにしても一体どうやってこの色を、微妙な青と、微妙なアーモンドの花の色をだせたのか・・・これもやっぱり赤ん坊の肌？」

「そうだ、あの頬だよ。テオの赤ん坊の・・・」

以上、私とゴッホの会話である。この旅行を思いついたのも「アーモンドの花」が見たいという衝動からだった。ロッテルダムからキンデルダイクに日帰りし、世界遺産の風車を見た後、アムステルダムに向かう電車で、アムスについたらすぐ、ゴッホ美術館に直行しようと思った。普段から長蛇の列と聞く。閉館前の2時間くらいが空いてきてゴッホと話しながら絵を見るには丁度いいだろうと思った。

イタリアの街、建築物、なかでも回廊を訪れると「よく来たな」と言われる。管理人や、その場に居る旅行者からではない。建物から話しかけられる・・・これはある建築家の先生が話していたことである。無論、回廊か、その建築物の作者と無言で対話するということである。

信じがたいようなことだが、私にはこの心境が良くわかる。最初にゴッホの「アーモンドの花」をみたのは安田美術館だった。いつのことか覚えていないが、西新宿のオフィスで働いていたときだと思う。吸い込まれるような青にしばらく魅入っていたのを覚えている。

「馬鈴薯を食べる人々」から始まって、胸が詰まるほど苦しいゴッホの気の中で、1枚だけ別のオーラを出していた絵がこれである。弟テオに子供が生まれたときに描いたものだと解説を読み、ああ、なるほど、そうか、どおりでと思った。

イタリアの気も少々苦しく感じるようになっていたので、ふと、「アーモンドの花」を見て、ゴッホに会って来ようと思い立った。ファンゴッホ美術館はアムステルダムにある。しかし、郊外のクレラーミュージアム美術館か、それともデン・ハーグで開かれているゴッホ展か、もしくは日本か、一体どこにこの絵があるのか、見当もつかな

かった。

1階の常設展を飛ばし、すぐ二階に駆け上がった。最初は肖像画から始まる。時系列配置なら後半だろうと、反対側にまわる。余談だが、日本人の建築家が手がけたこの建物も光の取り入れ方が上手く、ゴッホの気を良く配置してある。

ひときわ目立つ青をみると無言の言葉が、溢れてきた。

思い込みに過ぎないといわれればそれまでである。もちろん、ゴッホはもうこの世に存在しない。しかし、私のように魂の会話をする人間が他にもいるとする。それは何も同時代の人間に限らない。私より前の時代の人かもしれないし、私が死んだ後も、誰かがこの絵を見て同じように会話をするかもしれない。

そう考えるならば、ゴッホは永遠になる。彼の生まれた時代では受け入れられなかった孤高の天才は、普遍性をもった点になる。生まれて、何かを生み出し、死んでいくという生命体のサイクルが永遠に繰り返されるのが宇宙だとするなら、ゴッホもまた、宇宙の中のたった一つの点になっている。

この絵をしばらく魅入って、1時間ほど館内をまわり、また、アーモンドの青に戻ってきた。椅子に腰掛けてゴッホとの会話に没頭する。気がつくと涙が乾き、私は深く呼吸をしている。

やはりゴッホはこの絵を描いたとき、幸せだったのだと思い、私はようやく出口へ向かった。

なぜ絵を見るのか？答えは人それぞれだと思うが、私の場合、答えは簡単、絵と対話するためである。さらに、絵の背後にいる作者と対話するためである。静物である絵と語り、この世に存在しない作者と話すとは、妙な話かも知れないが、事実だからしょうがない。

芸術とは客観性、普遍性を持たせることが難しいものの一つであり、個人の価値観と深く結びついている。好みの問題なので、誰が何と言っても、自分が好きなものは良いし、どうしても好きになれないものもある。

同じ絵を見ても、見る側の状況によって見方も変わる。10年前と今とでは、ものの見方も価値観も接し方も違ってくる。だから、同じ絵であっても何回見てもかまわないと、私は思っている。自分が絵を描くようになると、色使い、構図、画法などさら

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

に別の見方が加わる。それを通して画家が何を思い、何を感じてこの絵を描いたのか染みるようになってくる。

繰り返すが、これらは全て主観的なことで、自分の勝手な思い込みである。

ゴッホ美術館の「ひまわり」より、安田の「ひまわり」の方が「生けてる（イケテル）」と思った。安田をもう一度みることができたら、実際は、もしかしたらやりすぎかもしれない、これは日本に帰って確かめてみたくなった。

今回はじめて「ゴッホの椅子」を見た。ゴッホが死んだ時に描いたという。いい絵である。これは、ないだろうと思う。もし仮にあっても、この緑は全然違うだろうなとも思う。何がないのか？という絵葉書である。いつも美術展で、私が惹かれる絵が絵葉書としてショップで売られていることはない。おそらく私はマイナー嗜好なのだろうと思う。仮に見つけたとしても、自分がたった今見てきた絵とはことごとく違うので、結局買わないことが多い。

ゴッホ美術館ではエゴン・シーレ展もやっており、そちらも見て周ったら閉館だと言われ、すぐ出口に行かされた。閉館10分前なのでショップは立ち入り禁止になる。翌日、隣の国立美術館を訪れた帰りに、昨日のチケットをだし、ショップだけ入れてくれとお願いしてみた。答えはノー、今日入りたければ今日のチケットを買えという。イタリアなら、「ショップだけか？少しだぞ」と言って入れてくれるところである。

チッ、と舌打ちをしながら、私は、あっそうかと気付く。

融通の利かなさも、オランダのようにキッチリと合理的な社会であれば当たり前で、自分の方がイタリアにかぶれすぎてしまっていたのだと。

3 フランケン・ダッチマン

さて、いつも飛行機の乗り継ぎでしか降りたことのないスキポール空港からオランダに入る。空港にはその国の臭いが充満するという。韓国ならキムチ、イタリアはトマ

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

トソースとオリーブオイル、何と言ってもカフェである。日本でも醤油の臭いを感じる。オランダはチーズ臭いといわれていたが、さほど乳製品の臭いは感じなかった。

それよりも、オランダ人のでっかさ、ガタイの良さに圧倒される。オランダ男性の平均身長は180近いと聞く。わがクラスメートのクラウスも180を越える、長身のイケメンである。

髪はブロンドが多い、かといってモデルのように美しい人ばかりかというところではない。男女とも額の部分（前頭葉？）が張り出し、彫が深く、眉間に皺があるのが特徴である。一步間違えばフランケンシュタインでは？と思える殿方が多く、何故かみんな背中を曲げて、猫背になって歩いている。ああ、ここはゲルマンの国なんだなと実感する。

これがミラノであれば、例えば自分の半径20メートル以内に最低一人はミケランジェロの彫刻のような、あるいはロベルト・バッジオのようなイケメンが居る。長身といっても170台が主流で、「歳相応」におしゃれである。センスのいい人は生まれる前から、何代も続いているんだろうなと予想できる着こなし術を心得ており、上質のものをさりげなく着ている。

「イタリア人は手足が長いから、ブランド物も良く似合う」というコメントをよく聞く。が、彼らのセンスは背格好、体格の問題ではない。現にラテン系のイタリア人の中には170センチ以下の男性も多く見かける。何年も前にローマの空港で、太鼓腹のおじさんが、グレーのシャツに黒のネクタイをしていたのを見かけた。ネクタイの柄にグレーが入っており、全体として統一されているのである。黒のコートから見えるジャケットは黒、近くで見ると銀に近いような微妙な縞が入っていた。樽のお腹を堂々と見せて、悪びれた風も無く（当たり前だが）、サングラスも似合って独特の雰囲気醸しだしていた。

これはこれで、貫禄があって、エレガント（英語ではエレガント）と呼べるのである。そうか、センスとはこういうことを言うのかと思ったものである。

空港から電車に乗り継ぎ、オランダ最南端のマーストリヒトまで電車で直行した。ここまで来ると、「コテコテ」ラテン系のイタリアの雑踏が懐かしくなってくる。ネウ

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

かつての商売柄申し上げれば、地図を広げたなら、まず水脈をみることである。河、海、小川など、水は高いところから低いところへ流れるので、概ねの高低差がわかる。次に高い部分に着目すると、だいたいそこに見所がある。教会、寺社仏閣、広場、市庁舎、高級住宅街などなど・・・そこから繁華街、目抜き通りを見つけ、時間と相談しながら散策する順路を決めればいい。

地図から得られる情報は多い。例えば、意外と知らない人が多いが、地図は基本的には上が北になるように作られている。写真を撮るときに逆光になるか否か、朝日や夕日が見られるかなど、有用なインフォメーションは多い。隅のほうにスケールがあり、これを使うと駅から中心までの距離などがわかる。歩くときは80mを1分として計算する。

さらに余談になるが、私は地図の読める女である。旅の同行者からはよく、マップちゃんと呼ばれる。そこで、あるベストセラーについて、脱線ついでに考察を加えてみる。

たいていの女性というものは自然の理を考えると、理論的な筋道を追うことが苦手なようにできている。生活の糧を得ることに専念したら、他の生命体を無償で生み出すことはできなくなる。周囲の状況から現状を判断し、どの方角に向かうべきなのかという判断、ミクロとマクロの間をシフトするという作業に向かないようにできている。知らない街で地図をよみ、目的地に待ち合わせ時間に到着するのは至難の業になる。当然誰かに聞かざるを得ない。人の話を聞かないと永遠に目的地に到達できないからである。

一方、たいていの男は生まれつき利を追うようにできている。おそらくヒトが二本足歩行を始めたときから、生活の糧を得るため、利益追求に根ざした理屈を選好するようになり、現状、目的、手段を分析し、これに応じた行動が採れるようになっている。これは男が生まれつき持っている個人別々のモノサシであるので、わざわざ人に教える必要は無い。自分は右だと思っているのに左だと言われ、いちいちそれに従っていたらこれまた永遠に目的地に到達できない。したがって男は地図が読める能力を持つが故に、他人の話を聞かなくなるのである。

さてV・V・Vに話を戻すと、真っ先に訪れたインフォメーションは、案内所ではなく一つの独立したみやげ物屋のようだった。地図も無料ではない。ベーシックバージョン

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

ンは2ユーロ、全オランダが載っているものは何種類もあった。このほか VVV ロゴの入ったシャツや木靴などのお土産、自転車、スポーツグッズも売っていた。

午後3時からマンストリヒトを周ろうとする我々には2ユーロ（300円）は少々高かった。同行者のメイが持っているガイドブックの地図だけで十分やっていけると思いい、地図は買わずに教会を目指して歩いて言った。マップちゃんの威力発揮である。

なるほど、さすがオランダである。観光案内所の無料地図は無駄と言えば無駄、どうせなら必要なだけお金をかけて売った方が良くという商人魂に圧倒された。小さな国土ながら、オランダのあらゆる町にこの VVV があるという。さながらチェーン展開しているコンビニのようである。

これと好対照を成すイタリア企業として BMW イタリアを思い出した。同じローマ字三文字でもこちらはかなり違う。モッコーニの卒業生が、イタリア BMW の CEO であり、3月のスキーツアー中 X5、X3の試乗会をやっていた。コテージとホテル、メインの宿泊先二箇所に受付ブースを設け、各所に3人のスタッフが張り付く。率先して宣伝するでもなく、スタッフ同士が四六時中おしゃべりしている。試乗希望者が来たら、重い腰を上げておもむろに電話をかけ、やっと車を手配する。

ディナーパーティの前にアペリティーボ（食前酒を飲みながらダベる）があり、そこで何故か生徒全員に、イタリアにしては、あまり趣味のよくない帽子を配っていた。とても宣伝 PR 効果は望めそうも無い。スタッフ、帽子などキャンペーンのコストに対し、収益が見込めないのでは？と心配したくなるが、それは杞憂というものである。BM はネームヴァリューが高いので、イタリア市場でモノポリーである限り、また世界の BMW の中でトップの売り上げを目指すのでもない限り、このようなお遊びみたいなプロモーションでも十分やっていけるのである。

さて、ここで無駄ということについて考える。オランダ式は商人らしく、一切の無駄を省いている。顧客もサービスを選ぶことができ、収益性の点からも一貫した合理主義である。ただ合理性の裏に、所詮ゼニやないか、全てカネや、という側面も見え隠れする。慣れてしまえばそれまでだが、行き過ぎると殺伐としてこれまた少し寂しい。

一方イタリアは無駄だらけである。無駄のしわ寄せは立場の弱い者か、もしくは税金でまかなうようになっている。ところがこれはこれで、楽しみという面では割と良くまわっているシステムである。少なくとも、BMキャンペーンでは従業員は余裕を持って遊びながら仕事をしている。確かに進歩的・革新的なものはないが、無駄がもたらす沢山の遊びが、人に「そこそこ」の満足を与えて、結果的には「のりくらり」安定したパフォーマンスになっている。

社会・経済のパターンとしては、一体どちらが好ましいのか？双方の良さを合わせたところだが、正反対のモノなので難しい。郷に入っては郷ひろみ、環境に馴染むしかならないのか？それとも価値判断自体避けるべきものなのか？考えている頭にホワイトビールが心地よくまわっていった・・・。

5 棚からデーニッシュ

唐突だが、最近、私の周りには、「この人かわいい」と思わせる男性が多い。恋愛感情どころではなく、「まったく、子供みたいだなあ・・・」と思わずにはいられないのだ。

ビジネスストラテジーの教授ピッケルもその一人である。度々日記に書いているが、MBA 理論では神様の存在「マイケル・ポーター」の弟子である。うちのビジネススクール専任講師で、ポーターその他のビジネス戦略論を講義している。講義スタイルは非常に大胆、かつ攻撃的？派手に机の合間を歩き回り、叫びに近い問いかけの連続で、とにかくテンションが高い。観客を引き込むことを独自に研究しており、緻密な戦略を自分のペースでダイナミックに述べていく。

そのダイナミックな男が、私の前で片ひざを抱えて、椅子にすわり、上目遣いで私を見上げている。ピッケルはデンマーク出身、茶髪、長身、栗色の瞳で見かけは典型的な北欧系である。小柄な私とは立って話したら30センチほど違いがある。

その男が、自信なさげに、心配そうに私に尋ねる。「ヨーロッパのビジネススクールの教授が、日本で仕事を見つけられると思うか？」と。

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

オフィスアワーに彼とミーティングをしていたときのことである。私は腕組みをして顔を上げ思案する。はたから見たらこれは結構笑える光景である。大男が少年のようにひざを抱え、片足をブラブラさせて、つめを噛み、心配そうに母親に何か訊ねている。そんな調子である。

私があなただったら、教授、と言って私は続ける。オランダもしくはベルギーのクライアントとの実績を語ります。そもそも、ビジネスストラテジーとはアメリカで生まれたものです。彼らはそれをまずアジアの土壌に持ち込み、これはイケルということを見ました。アジア社会特に日本に、アメリカ製の仕組み自体の仕込みがなかったので、さて今度はヨーロッパだとヨーロッパ市場を目指しています。けれどもご存知のように、ヨーロッパはキリスト教主体の保守的な社会です。アジアと同じようにはいかない。もしアピールするなら、ヨーロッパで進取の気質に富む国の例をどれだけ多く、魅力的に語れるかという点でしょうか？

百聞は一見に・・・である。実は今回のオランダ旅行を思いついたのも、ヨーロッパでイタリアと対極を成す国の実態を見てみたかったからであった。

この手の話を私はいつもピッケルとしている。もちろん私の英語はイマイチなので、これほど流暢にズバズバ言えないが、とりあえず、ピッケルにとって非常に面白い観点で、彼の望む情報、とりわけ日本のナマの情報を与えている。従って、教室ではイケイケどんだんの彼が私の前では少年のようになるのである。

ピッケルはわかりやすいデニッシュガイである。自分は教授で教えることで生活の糧を得ていると心得ている。彼から何かの教えを得たければ金を払わないといけない。私は MBA の生徒なので、事務局にアポイントの設定をお願いします。その結果、彼は私とのミーティングもサラリーとしてカウントできる。

ただ教えるだけではなく、時折エキサイティングな情報も得られるので、彼は私とのアポをすこぶる気に入っている。と私は思っている。これまで、インターン先をどうやって探せばいいか相談に来た生徒は多数いるだろう。しかし、インターン先と交渉して MBA 生徒でありながら仕事を取ってきた生徒はいなかったのだろう。（これは過去の彼とのオフィスアワーで私が相談した内容である。）教授職はマンネリ化しやすく、ルーティンワークになりがちなので、私の話は彼にとって丁度いい刺激なの

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

である。「わかりやすい」彼は、「ユキ、君とのオフィスアワーを俺はとても楽しみにしている。」とかつて語っていた。

私の方とは言えば、自分の情報にコスト意識はない。逆に当方が意識していなかった意外な収穫を、この「わかりやすいデンマーク人」から得られることもある。

「一度でいいから日本に行って、富士山を見てみたい」とピッケルは言う。私にとっては意外な一言であった。世界で最も美しい、見事な対称形の山だという。写真でしか見たことはないが、さぞかし綺麗なんだろうな、とも言っていた。

ここで私は考える。美しい山なら世界に多々あるだろう、エベレスト、マッターホルン・・・そうか、そういえば・・・とさらに気付く。これらの山はかなりの高度まで行かないと見ることはできない。平野から単体の山を見ることは不可能である。一方富士は平野から山というものの形自体を見ることができる。私の今までの旅行経験から、このような条件を満たすのは富士山だけである。

10数年前、短期出張で浜松に住んでおり、東京から「こだま」に乗って浜松に帰った。秋の夕暮れ時だったと思う。「ねえ、富士山が綺麗よ。」隣に座っていた見ず知らずのご婦人が私にこう話しかけ、私は書類から目を上げて、目の前に迫る富士を見た。今でも記憶の隅に焼きついている富士は、美しいシンメトリーを呈している。

関東は平野であるので、西新宿のオフィス街から富士山が良く見えた。二度目に引越したオフィスからは、冬の間毎朝綺麗な眺めを楽しんだ。これまた余談であるが、オフィスビルの賃料はいくらが妥当かという査定も、以前何度もやった。一つのフロアで富士山が見える側とそうでない側の二箇所賃貸スペースを持つビルがあった。オーナーとしては富士山側は眺望がいいから相当高い賃料がとれると主張する。

私の価値判断基準として「疑わしきは、差をつけず」がある。良し悪しの判断が微妙で、どちらがいいとも、明らかに劣るともいえないときは、イーヴンで扱い、どちらもプラマイゼロ、差をつけるべきではないだろうと思っている。現に今 MBA の勉強をしていてもこの基準を使うことが多い。

大袈裟だが、こうして世界を見てみると、より広い視野に立ってモノを見てみると、なるほどピッケルの指摘は「ごもつとも」である。西新宿オフィス街は富士の眺望を眺めるには絶好のロケーションである。さらに少なくとも一年のうち3分の1はこの究極の対称美を堪能することができる。以外にも、中央公園のホームレスの人々はこのデータを知っているのかもしれない。かつての査定は、格差をつけるべきだったなと実感する。

ピッケルから得たこの情報は、私にとってはまさに目から鱗であった。むろん、この日は私のビジネスプランの検討がメインの話題だったが、彼の少年ぽい一面といい、日本が世界に誇れる美といい、それ以外の収穫も多かった。

この情報はタナボタ式に得たものである。棚からボタモチといたいところだが、彼はデーニッシュガイなので、棚からデーニッシュペストリーと訳すべきだろう。

6 マジンガーゼットと英国紳士

諸君、今日は俺の最後の講義である、だが俺は決して涙を流さない、涙は嫌いだ、君らの門出に相応しくはない。諸君の成功の前祝に相応しいのは・・・そう、一杯のスコッチだろう。

このフレーズを聞いた途端、マジンガーゼットの主題歌「俺は、涙を流さない・・・」を思い出した。ロボットだから、マシンだから・・・だけど判るぜ、燃える友情、君と一緒に悪を討つ・・・と続くのである。

このセリフを口にしたのは、マンチェスター出身のマーケティングの教授である。私は今ロッテルダムのビジネススクールでMBAを聴講している。ここは他のビジネススクールからのヴィジター教授が多いという。熱い友情、冴え渡るプロ意識、この教授のBGMにはまさにこのアニメソングが相応しいような気がした。どうも最近英国紳士と接する機会が多い。すると、オランダの次に実地調査が必要なのは英国ではないかという気になってくる。

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

イタリアのMBAではすでにマーケティングは終了した。この日はコトラーの本でも最終部、マーケティング部隊を結成するには一体何人、いくら予算が必要か?という議論である。不思議なことに当方のマーケティングの先生はイタリア人女性であるが、ミラノでも珍しく全身をバーバリーで固めていた。イタリアでエレガントとされる女性のファッションの主流からはずれ、彼女の反イタリア精神と気品がうかがえて、あれはあれで楽しかった。

さて授業内容を比較する。マジンガーゼットではなくマンチェスター先生の特徴は以下である。1 グローバルな視点で具体例を使う。2 マーケティング理論全体像からの落とし込みが上手い。3 ユーモアのセンスと間の取り方が上手い。

1. この先生の使う例は、アメリカ、日本、中国、そしてイギリスなど国籍とエリアに限定がなかった。一方モッコニーとは言えば、どう考えてもイタリア企業中心である。内部のものでないわからないデータもあるので、希少価値は高いがもともと日本人・アメリカ人が意識するマーケット自体が、イタリアという国には存在しないので、マーケティングという観点からは学べることに限界がある。どちらがいい悪いではなく、個人の目的にフィットするかどうかということだと思う。

2. マーケティングをはじめ、MBA理論は「戦略」という言葉から伺えるように、全体像から細部への落とし込み、さらにミクロからマクロという逆方向への帰納が難しい。議論が吹っ飛ぶが、世界は単一国家ではないからである。このマンチェスター先生の場合、非常に細かい点を議論しながらも、マーケティングという大筋を常に意識しており、一つの産業のサイクルとマーケティング部門人数の関係を、具体的リサーチ例を使って説明してくれた。実際、将来マーケティングマネジャーにでもなった暁には、クライアントへの説得力あるプレゼンに使えるそうで参考になった。

3. イギリス英語のリズムか、この先生のオリジナルか、生徒への問いかけ、それに対する答え、話題の転換、これらの間の取り方は絶妙だった。

かといって、ガチガチのお堅い講義かというところでもない。肌の色の黒い女性が手を上げて質問する。

余談だが、ここオランダは人種差別が少ない国だと聞く。国力が貿易から発達しており、早くから移民も進んだ。商業的合理主義が生んだ利点だろう。ユダヤ人アンネ・フランクも長いことアムステルダムに隠れ住んだ。ヨーロッパでこれほどあらゆる人種が混在し、独特のカルチャーを形成している国も珍しい。

ビジネススクールにおいても、人種の多様さに驚かされる。アジア系、アフリカ系が多く、ヨーロッパ、アメリカ等の白人系は少なくなっている。質問した女性はそのアクセントから、おそらくアフリカのフランス領だった国から来たのではないかと思う。

彼女の質問にマンチェスター教授はこう答える。君の質問にはより深い説明が必要になるだろう。残念ながらこの場で皆とシェアするのは適当でない。講義の後に議論しよう。俺は君のフランス訛りの英語をことのほか気に入っている。どうかこれからも、質問することをためらわないでくれ。

実に上手い交わり方である。日本人は挙手する前に、自分の疑問が皆に披露するのが好ましいか否かについて悩む。そしておそろおそろ手を上げるか、自分の中に飲み込むか、後から質問するかである。私はいつも最後の手段をとっている。人前で英語をしゃべるのが嫌というのもあり、授業後教授に聞きに行くことが多い。

多くの生徒は、疑問はその場で解決しようと手を上げる。その結果、教授とその生徒のサシのどうでもいい会話を教室の大多数が退屈しながら聞くことも多々ある。このマンチェスター先生は自分のペースで進める講義の流れを心得ており、室内の気を滞らせる質問を封じたのである。一方でこの生徒に対する気遣いも忘れない。私は思わず笑ってしまったのだが、彼は彼女のフランス訛りをほめた後、最後にこう付け加えた。I like your French accent. I love you と。

イギリス人やるじゃないかと私は思う。さらに余談だが、日本にいたときの私の英語の先生ラッセルはニュージーランド出身である。かつて私にこう言った。ニュージーランドはイギリス領だったから、英国人みたいに男は女を褒めるのが苦手なんだよ。無骨っていうか、慣れてないっていうか、イタリア男みたいにお世辞もいえないし、どうやって喜ばせるかわかんないんだよな・・・と。この情報によるインプットでは英国人イコールお世辞など言わない無骨者という図式が私の頭の中で成り立っていた。

このマンチェスター先生、熱血という言葉が相応しいほど、熱いことは熱い。が、この先生キザでも、またカタブツでもなく、品のあるユーモアとプライドに溢れているのである。授業の最後の小喃も小気味良く、さながらシェークスピア劇をロンドンの下町で見ているような錯覚に包まれ、私はスクールヴィジットを終えた。

7 女が20代後半でやるべきこと

今回のオランダ旅行の同行者として私は台湾人のメイを選んだ。理由は多々ある。まず、3月のスキーツアーのルームメイトとして彼女は私を指名してくれた。ユキ、一緒の部屋を希望しないかと聞かれたので、私は彼女に聞き返した。「だって、メイ、あなたとマッシモは付き合ってるんだから、あなた達カップルで同じ部屋を希望するのが普通じゃないの・・・？」これを聞いた彼女が両手と首を激しく振り、日本語で私にこう答えたのである。「ダメ、ダメ、ダメ！！」と。彼女のこの反応に、いい歳したオバサンの私は、教室中が振り返るほど大声で笑ってしまったのである。

さて、誘ってくれた恩もあり、気立ても良く、私の下手な英語にも我慢強い彼女である、「チューリップを見に行かない？特に23日は花で作られた山車が町中ねり歩くパレードがあるよ。」と言って最初にメイを誘ってみた。26歳、電気機器メーカーで3年働き、将来はグッチなどブランド会社でキャリアアップしたいという、好奇心と向上心に溢れている。

「え、オランダ！もう、イタリア生活と勉強でストレス溜まっちゃって。どっか行きたいと思ってたの！！もちろん行く！」とこの話に賛成してくれたのである。

だが、彼女曰く中国台湾人はケチなので、費用は極力抑えてくれとのこと、旅のほとんどはベッドアンドブレイクファーストと呼ばれる一般民家とユースホステルに泊まることにした。

ステイオーケーという全オランダにあるチェーンは典型的ユースであり、ドミトリーで二段ベット、シャワーは共同、キッチンが使えるので自炊する客が多い。1泊シートと朝食込みで23ユーロである。

オランダ最南端のマンストリヒトから電車を乗り継ぎデンハーグに行き、スーツケースをガラガラ引きながら市内を廻った、やっとたどり着いたロッテルダムのユースでお互いクタクタだった。スーパーで買ったもので簡単に夕食を済まそうということになった。ベジタリアンの私として異存はない。野菜のパックとスープの素、数本のビール、今朝の朝食のパンで十分である。

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

地下の台所で野菜スープをすすり、ほっと一息ついた。

仕事キッチリタイプの彼女は、今回も全ての時刻表を二人分プリントアウトしてくれた。私は宿泊施設担当になり、ホテルの予約、連絡先確認表及び地図の用意をした。私はどこでも寝れるし、割り切りがあるが、この手のユースは初めてだと彼女は言う。昨夜はうるさくて一睡もできなかったらしい。

メイ、あなたを見てると10年前の私を思い出す、と彼女に切り出す。以前からいつも感じていたことだ。

お得な電車の割引パスの情報を探し、国鉄の窓口で30分かけて真剣に交渉してくれた。美食の街マーストリヒトの観光を4時間で終える裏技を編み出してくれた。オランダ用の変換プラグをどうやって入手するか、写真のメモリーをセーブするにはどうすればいいか、彼女の頭はいつも考えるべきこと、前倒しでやるべきことで一杯である。

いろいろと段取りしてもらって済まない。メイのおかげで、最も効率よく廻れていると思うと私は心から感謝を述べる。

ユキ、言いたいことはわかってる。私も母親からよく注意される、とメイは続ける。あなたは神経質すぎるし、なんでも完璧にやろうとしすぎるって。時間にも厳しいし、もっと肩の力を抜かないとダメだって言われている。

ああ、懐かしいなと微笑んで私は彼女に語る。私の場合は、もっと極端だった。今の私からはおそらく想像できないかもしれないが、今のメイよりももっと神経質で、何もかもがキッチリしていないと気がすまなかった。その分、よく怒ってもいた。自分は時間どおりに行動しているのに、時間すら守らない人が許せなかったし、自分が周到に準備できるのにどうして他の人ができないのかと、狭い見で見ている。努力して少しでも前に、人より一歩先んじることを、常に考えていたような気がする。

彼女はうなずき、「ホントニー？」と私に聞き返す。「本当です。」と私も日本語で答える。

なるべく自分を変えようとしていると彼女は言う。でもどうすればいいかわからないと。

夜の8時になってようやく暮れてきた夕日が、半地下のキッチンのテーブルに当たっている。旅のストレスか、彼女の肌と長く茶色に染めた髪に疲れがみえる。

自分の肩に手をやり、凝りをほぐしながら私は彼女に答える。

メイ、何もしなくていい、自分から進んで、何か変えよう、変えていこうとしなくていい。なぜなら自然とそうなるから。今にあなたにも、必ずわかるときが来る。いろんなことをキッチリやろうとしなくても、自然と出来なくなるときが来る。それまで、無理に変えようとしなくていい。

そして、歳をとるにつれて、見返りを求めなくなってくる。自分が時間とエネルギーを注ぐ努力が、すべて自分が望むように報われるとは限らない、ということがわかってくる。そうするとどうなるか。自然と優先順位ができてくる。何に力を注ぎ、何を手抜きしたらいいか。全ての骨折りに、それに相応しい結果は伴わない。そうすると、結果よりも、過程に目を向ける余裕が出てくる。

A piece of advice、参考までにと行って私は続ける。過程を楽しむことができるようになると、だんだん、追い詰められるという感じがなくなってくる。適度にリラックスしてストレスを少なくしていれば、心身ともに健康でいられるようになると思う。花の命は短くて、である。自然の衰え以上に早く、皺を顔に刻みつける必要はない。何度も言うけど、私があなたの歳には、メイ、もっと神経質だったし、もっとキッチリしないと気がすまない性格だった。

それが、今はこれほどズボラになっている。悲しいかな？何の努力もせず、自然と抜けてきた結果である。シャープな面々の多いMBAにあって「ユキは天然ボケ」と有名ならしい。

30過ぎて体力勝負のMBAは過酷、体にこたえると良く言われる。けれどもなんとか試験をこなし、今まで何となく漂ってきている。20代後半の自分の過度なエネルギーで突き進んでいたら、体を壊していたかもしれない。クラスメート、キヨシのようなニッポンダンジには「何を甘いことを言ってるんですか!!」と叱咤されることだろう。が、しかし「いい加減」で海外留学生活を送るのも、以外に悪くないかもしれない。

8 レンブラントとブラックジャック

どうもレンブラントという人は手塚治虫の「ブラックジャック」先生に似ているようである。金ばかり気にして肝心の内蔵に気を遣わない人々を毛嫌いする点、腫瘍なり乞食なり、一般の人々が省みないものをこよなく愛し、魂を吹き込んでみようとする点、これでもかと言わんばかりに自分の醜い部分を曝して見せる点、わたしから言わせてもらえば、どちらもしょうもないほど、「愛すべき変わり者」である。

かたや人類史上最大といわれる天才画家、かたや世紀の天才外科医であるから、変わり者などといったら甚だ失礼極まりないと承知している。しかし、フン、俺はどうせ絵を描くこと以外才能なんかないよ、と嘯くあたり、どうせ俺はノーライセンスだからな、せいぜい命にしがみつくん人間から搾り取らせてもらうぜと、悪人を気取るあたりが、どうしても人間臭くて、かわゆくてしょうがないのである。

今彼らが私の目の前にいたら、よしよしと頭を撫でてあげるのだが・・・おそらく余計なお世話と言われるだろう。

私はもちろん天才ではないが、時々たまらなく天才の悲しみを理解してしまうことがある。ゴッホにしろ、レンブラントにしろブラックジャック先生にしろ、孤独に耐える人間の気持ちが多少なりともわかってしまう、そういう境遇に生まれたらしい。

天才レンブラントの絵は Rijk 美術館で堪能できる。アムステルダム滞在2日目は午前中レンブラントを見た後、メイと待ち合わせして、アムステルダムウォーキングツアーに参加する予定だった。ところが歩いて30分以上かけてアムスのユースを探した挙句、疲れ果ててしまい、宿でフテ寝することにきめた。30分程度休んでいると、

地図を見てみようかなという気になってきた。歩いて数分の距離にレンブラントの家があると知る。今ならまだ十分間に合う時間である。

さっそく靴を履き、レンブラントの家めがけて歩き出した。Rijks 美術館のかの有名な夜警の私の印象は「夜警のわりに明るくないか！」であった。期待どおりか、そうでないかはわからない。司馬（遼太郎）さん曰く、最も幸せそうなのはサスキアとの結婚を祝った銅版画であった、らしく、この一枚さえみればいいか程度の気持ちで出掛ける。

9 優等生の天才

レンブラントの家の最上階には銅版画が多数展示してある。その小ささから、一般の美術館には向かない。が、しかし、である。これらは小さい分、画家の天才領域が冴え渡り一見の価値がある。司馬さんが言っていたのはおそらくコレクション最初の結婚後4、5年たったサスキアとレンブラントではないかと思う。乞食、裸婦、風景画、この画家が歴史上名高い天才であったことは誰もが疑わないであろう。

私のお気に入りには聖書物語である。アダムとイブ、磔にされるキリスト、ダビデとゴリアテなど、楽譜の手直しをしなかったモーツァルトを思わせる、鮮やかな描きっぷりである。あるいは、白黒のハリウッド名画「イントレランス」はこの銅版画コレクションに着想を得たものではないかとも思わせた。

さてここで、優等生の天才としてフェルメールをあげたい。フェルメールを見たいと思われるなら、真っ先にデンハーグ、マウリッツィ美術館を勧める。真珠の耳飾の少女、デルフトの眺望など、安心して見られる天才である。

私は絵の専門家でも何でもないので、素人判断で好き勝手なことを言わせていただく。画法もモチーフも色遣いもすべて安心してみていられる。司馬さん曰くの「どうだ、驚いたか！」という要素は少ない。安心してみられる中で、神業に近いバランスを呈している。これがフェルメールの天才たる所以であると思う。オランダに二年間住んだ人が、デルフトの眺望について、「あれぞ、オランダです。」とコメントしていたのが印象的だった。

フェルメールは奇をてらわない分、庶民にも愛されたが、失敗の許されない緻密さで天才の名声を得たのである。

ちなみにマウリッツィは2時間ほどでまわれる。有名なレンブラントのトゥルプ教授の解剖もここにあり、個人的には、「口説きを頑として撥ね付けるご夫人の図」が私のお気に入りである。デンハーグに立ち寄る予定がなくても、ぜひ途中下車を勧める。国連美術館？市美術館も美しく、海岸沿いのリゾート地も気合を入れれば歩いて行ける距離である。

旅に出たときは、見たい物をすべて見尽くすことなく、思いを残すことを常としている。再び訪れる際の楽しみを温存するためであり、疲労を残さず旅の行程をこなすコツだとも思っている。オランダは勉強になる、エキサイティングな国である。今一度訪れることがあるとしたら、まず、デンハーグを再訪したいと思った。

10 デーヴェンター

ガイドブックにも載ることがない小さな街、それがデーヴェンターである。アイセル川が中央を縦断し、鯁漁とハンザ同盟で栄えた中世の町並みの美しい街である。見知らぬ国を旅するときは小さな街を訪れてみるに限る。それもその街に住む人に案内してもらおうことを勧める。わずか半日であっても、見知らぬ国を身近に感じることができ、国を自然に形作った背景を垣間見ることができるからだ。

今回はわがクラスの学級委員クラウスに相談する。彼はMBAで唯一のオランダ人である。彼自身は翌週の女王陛下の誕生日に帰省予定であるという。弁護士である彼はアムステルダム暮らしが長かったが、幼少のみぎりと学生時代は、アムステルダムから電車で約1時間ほどのこのデーヴェンターに住んでいたという。

なれない国で公衆電話を使うのはしんどい。テレフォンカードを探し、間違い電話の連続の後、ようやくクラウスの両親に連絡がとれたのは、我々の帰国一日前だった。何はともあれ、アムステルダムの見所は私もメイもだいたい思いのままに見て周り、郊外も魅力的だったので、最終日の午後、デーヴェンターを訪れた。

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

オランダ語で大辞書という名のカフェに入り、ゴータチーズ入りのサンドイッチをクラウスママにご馳走になる。その後、中世の面影をいたるところに残すこの街を散策した。かつては大聖堂であった教会は聖像のみを取り除き、プロテスタント教会として使っているという。12月にはバッハのコンサートホールになるらしい。オランダらしい無駄のない使い方である。

かつての街は商人の組合がすべての権力を握っていた。街の建物殆どに丸いステッカーが張ってある。21世紀の今となってはハンザ同盟はもちろんないが、街の有力者が建造物保存協会を結成し、歴史的建造物の保存、修復に心がけている。

ハンザ都市はそれ自体が一つの国家であり、法律を決め、貨幣を鑄造し、交易の中心になった。当時の商工会議所は、今は美術館になっており、その外側に丸い鍋が貼り付けてある。贖金を作ろうとした男が油で焼かれた鍋だという。この建物の前に、元祖ホスピタルがあった。昔は旅人が最小限の食事と宿を求めた場所がホスピタルと呼ばれた。それがホテル、ホスピタリティの語源である。今この建物は中世の外観を残しながら図書館として改造されている。貨幣の鑄造所、ゴシック式の教会、女王陛下一向が御幸の際立ち寄ったカフェ、オランダの品揃えを誇るチーズ屋など見て回った。

プロテスタントのこの国は商業都市として発達した歴史が長い。政治も「町興し」も商人の組合が行う。日本で言えばロータリークラブの座長が、イギリス作家ディケンズのファンなので、クリスマスにはディケンズ祭りが開かれると言う。観光客と住民が皆ディケンズ小説に登場するかつての英国風の装束に身を包み、飲み食いし、お祭り騒ぎをするという。プロモーションの技術といい、街のデコレーションといい、商人の街ならではの発想である。

商売をする上では、見知らぬ相手が自分にとって金をもたらすか、それとも一癖ある食わせ者か、第一印象で推し量らねばならない。また、規模の利益、シナジー効果を考慮するとモノポリーは好ましい結果ではなく、協働体制が自然と築き上げられる。

クラウスをはじめ、オランダ人が偏見なく、まず人の話を良く聞き、質疑応答を通じて相手を理解しようとする姿勢はコマーシャリズムに根ざしたものだと思っている。持っている金は家に蓄え、決して誇示しないというスタイルも印象的だった。

クラウドの両親の家に呼ばれ、クラウドのパパに会った。イタリアなら、フェラーリかマセラッティを見せられるところだが、年代モノのクラシック英国オープンカーに乗せてもらい、これまたクラシックの二人乗り自転車に乗せてもらった。ニューイングランドのような風景の中を走る。いたるところ緑の木立に囲まれ、八重桜の桃色がまばゆい。クラウドの両親のように引退した名士がひっそりと、富を内にたたえながら暮らすには丁度いい隠れ家であると思った。

11 紀貫之の教え

私の無知をどうか許していただきたい。「花は盛りを月は隈なきをみるものにかは・・・」とは紀貫之の歌であると記憶している。古典の世界で、目で楽しむ花といえは桜、香りを楽しむのは梅と教わった。

満開の桜を心行くまで味わうもよし、しかしながら、今日咲くか、明日咲くかと待ちわびる心持もまたよし、盛りを過ぎた散りかけで、満開のときはさぞかし美しかったであろうと、想像させる余韻を残す桜もまた趣がある。月にしても同じである。雲ひとつない満月よりも、うす曇の向こうの月を想像し、三日月の夜には満月のまばゆい光に思いを馳せるのも良し。これらはすべて、四季の移り変わりを肌で感じる日本人の感受性である。

さて、話がかわるようだが、今回のオランダ旅行中、私は終始メガネをかけている。出発の前々日、アメリカ人のソフィアと家で夕食をとった後、飲みすぎてコンタクトを割ってしまったためである。かつては、どんなに酔ってもコンタクトをはずしていた私であるが、この日は最後に飲んだ頂きモノのブルネッロディモンタルチーノの質が問題だったようで、ひどい頭痛のため、洗面所までまともに辿りつけなかった。ようやくはずした右目を、なんとケースの蓋ですりつぶしてしまったのである。

朝になって、自分の愚行を反省するが、スペアも見当たらず、眼鏡屋に新品を注文して旅行に出かけることにした。旅行中はメガネを欠かさないが、もともと強めの度に設定しているため、目にかかる負担、疲労も強い。電車の移動中など、座っているときにはメガネをはずして、目を休めることにした。

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

焦点の合わないぼやけた目で、オランダの田園を眺める。緑の草原に白や茶で点々と見えるのは牛である。建物の屋根も瓦も輪郭がハッキリとしてない分、印象派の絵のようで、日の光に当たると色だけが目に飛び込んできた。薄い紫色は藤ではないかと思う。ミラノでも藤の花を多く見かけた。濃い桃色は八重桜、若葉の鮮やかな緑は柳である。意外にも日本と植生が似ているのに気付く。次々と移り変わる景色の中に、ひととき高い水面が銀色に太陽を反射させている。

ライデン近くになり、一面の赤、黄色、ピンクが目に飛び込んでくる。シーズン真っ盛りのチューリップ畑である。あわてて、メガネをかけようとして、はっと思いとどまり手を止めた。何もチューリップの花の一つ一つを見ることはない。この畑の延々と続く光景ははるか遠くが霞んでいる方が、遠近感があっていい。良く見えないことがプラスの効果をもたらすこともある。視力を弱くしたおかげで、全体像や、一風変わった視点でモノを見ることができた。

異国というのはそもそも、自分がそこに生まれて育っていないぶん、自然の理に反する物体であり、慣れるのに時間がかかるものである。最初から微に入り細に渡り、未知なる物を既知に変えていくのではなく、おぼろ月夜をたのしむように、盛りでない桜に思いを馳せる様に自分の中に取り込んでいくのが望ましい方法のように思った。

緑の多い、大学都市であるユトレヒトを過ぎ、デンハーグ路線に電車が入ると、窓の外には自転車をこぐ若者が多く、オランダ人の足の長さ、観覧車のような車輪が印象的だった。

12 オランダ人とピンク

グレーに合わせる色は何か？とイタリア人に聞けば、100人中99人は黒と答える。グレーと黒はエレガントの代表であり、冒険的なことを好まないコンサバなイタリア人は、この無難な組み合わせを選ぶ。

しかし、ここオランダでは多くの人がグレーとピンクを組み合わせている。ピンクもサーモンピンクであったり、街中、車窓にイヤと言うほど見かける八重桜のピンクで

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

あったり、いろいろである。全体として、女性はよりフェミニンな、かわいらしい印象になる。

イタリア人であるなら、アイメイクを濃くして、どこか一点セクシーな部分を残し、グレーと黒で渋く決めるところである。一方オランダ人はグレーのスーツ、これもパンツスーツではなくスカートに、華やかなピンクのブラウス、スカーフを合わせている。

ガタイが良くて一歩間違えると、男女の区別が難しいオランダ人ならではのアイデアなのかとも思う。デルフトの眺めが典型的なオランダであると聞いた。太陽が珍しいこの国では皆が春を待ちわびており、春がうれしくて、うれしくて、つつい身につけてしまった。何となくそんな印象である。

黒、グレーの組み合わせはほとんどと言っていいほどなく、イタリアンファッションに慣れている私としては少々驚いた。

日本のある自治体は、商業政策指導力が素晴らしく、株式会社と呼ばれている。

オランダは国自体が一つの株式会社で、国民がプロモーション部隊になって、さあ春ですよと、なんの義務も無いのにサービス精神から春をプロモーションしている・・・、そんな印象を受けた。

13 何ゆえに英語か？

クラスは、顔はママに、頭の中身はパパに似たようである。このパパは高級ベッドの会社役員をやっていたという。このベッド会社の工場がデーヴェンターにあるので、20年ほど前にこの街、デーヴェンターに移り住んだようである。

ママも流暢に英語を話すが、パパの英語は達者である。腰が低く、気配りと人を笑わせるコツを心得ており、役員とは言っても商売人としてのプライドが見え隠れする人である。半地下にはワイナリーとパパの書斎があり、書斎にはビリヤード台、絵画が雑多に置かれ秘密基地のような雰囲気をだしている。クラスメートのブラジル人カル

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

ロスもクリスマスにこの家に滞在したという。もてなしが好きで、話題に事欠かない人のようなのである。

知的で、まっすぐなパパの瞳が気に入って、私は気になっていた質問を投げかけてみた。

あなた方、オランダ人の目に、イタリアという国はどのように映りますか？

的確な言葉を選びつつ、無駄の無いしゃべりでパパが答える。

カトリックが深く社会に影響を及ぼしている国である。産業のめざましい発展は望めないが、芸術が育ち、人々は陽気で明るい、ゆったりとしたラテン気質を形成している。

見事な、必要にして十分な答えである。自分の答えを補いながら、さらにパパが私に訊ねる。

イタリアは身分階級、封建制が未だ根強いが、閉鎖的な歴史的背景は日本と似ているような気がする。日本は経済が発展し、イタリアは発展しなかった、その違いは何か？と。

実に鋭い質問である。私がオランダ人なら日本人に聞いてみたくなる内容である。

お粗末な英語で私は答える。

まず、元来の日本人気質があげられます。日本は稲作を中心とした農業国であるので、共同体意識、個の利益より全体の利益を尊重する風潮があります。これが企業という組織の利益追求を促進したのでしょう。さらに、日本は第二次世界大戦後アメリカに占領され、財閥貴族の解体が積極的行われました。松下、ソニー、トヨタ等起業精神を促進する環境が整えられたことも理由の一つです。

こう説明しながら、私は絶えず後悔している。もっと英語を勉強すればよかったと。このパパとの議論は楽しい。自分の語学力のなさで、コミュニケーションのチャンスを失うのは情けないことである。英語を勉強したのも、そもそも、コミュニケーションを行うためである。試験や瑣末なことにとらわれて、大切なことを見失っていたなと思う。

クラウドのママは優しく、どうか夕食まで一緒にとって行ってくださいと申し出てくれた。お言葉に甘え、夕食をご馳走になる。その間もいろいろな話題が食卓に上った。本当に真剣に英語を勉強しなければなあと思った。もっと自分の考えを誤解なく、ソフトに、しかも謙虚に伝える方法があるのだろうと思った。

異国の地は自分で理解しようとしないうりいつまでたっても異国である。通訳、翻訳などで理解することはできるが、日本語に置き換える点、手間、暇、誤訳のリスクがある。何かのフィルターを通して以上、自分の脳に与える刺激には限界がある。仮に共通の言語を持てば、意思疎通がスムーズになる。現に、オランダ人の彼らと日本人、台湾人の我々は、こうして考えを交換することができる。それが語学を学ぶ究極の目的であるはずだ。

今回の旅は重要な原点を、意識しなければならない中心軸を気付かせてくれた。

14 時代ということ（ソニーとオランダ）

中島みゆきの「時代」は私の好きな曲である。しかし、ほんの二週間前までは、出口が見えず、ミラノのアパートでこの「時代」を聞き、出口が見える日だけを祈っていたような気がする。今はこんなに悲しくて、涙もかれはてて、もう二度と笑顔になれそうになくても、あんな時代もあったと、きっと笑って話せる、そういう日が来ると信じていた。

だが今はこの「時代」を聞き入っていた日を懐かしく思い出している。

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

かつて黙々と英語を勉強していた際に、座右の書とし、毎晩数ページづつ読んでいた本がある。ソニーの創始者、盛田昭夫氏の「メイドインジャパン」である。これは当初から英語版で描かれており、日本語版はあくまでも各国訳のひとつに過ぎない。原書と和訳を繰り返し見ながら、まだ程遠いトフルのスコアを如何にして、あげていくか来る日も来る日も思案にくれていた。

イタリアのMBAから合格をもらったときも、この本だけは持っていこうと決意し、引越し荷物に入れた。

私の一番好きな箇所を引用させていただく。「MADE IN JAPAN」 E・ラインゴールド、下村満子、盛田昭夫著、朝日文庫

「ジュッセルドルフから汽車でフィリップス社の本拠アイントフォーフエンへ向かったが、西ドイツからオランダへの国境を越えると、風景が一変した。西ドイツは戦後間もないのに、機械化が著しく進み（フォルクスワーゲン社ではすでに一日700台の自動車を生産していた）、すべての国民は国の再建と生産に励み、新しい製品を非常なスピードで作っているように見えた。しかし、オランダでは自転車に乗っている人々をたくさん見かけた。ここは純粋な農業国、それも小農国であった。古いオランダの風景画で見たことのある風車が、至るところにあった。すべてが古めかしかった。ところがアイントフォーフエンについてフィリップス社を見たときには、そのあまりの大きさに度肝を抜かれた。フィリップスの電気製品が、東南アジアをはじめ世界各地で大成功を収めていることは知っていた。ではどんな会社を期待していたのかと聞かれると、自分でもわからないが、私の想像の中にあつた大企業NVフィリップスが、こんな小さな農業国の小さな片隅の小さな町にあつたのが驚きだったのだ。

私は駅前にあるフィリップス博士の像を眺めながら、私の先祖の村小鈴谷にも祖父の青銅の像が昔あつたのを思い浮かべた。フィリップス博士に思いを馳せながら町をぶらついたあと、その工場を訪れたとき、農業国のこんな辺ぴな町に生まれた人間が、このような高度技術を持つ世界的な大企業を設立したことに改めて感銘を覚えた。

それと同時に小国日本のわれわれにも、あるいはおなじようなことができるかもしれない、そう私は考え始めた。もちろんかなわぬ夢とは思つたが、オランダから出した井深氏への手紙に、「フィリップスにできたことなら、われわれにもできるかもしれない」と書いたのを覚えている。

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

その時私は英語がほとんど話せなかったから、これらの工場も一介の旅行者として見学したにすぎない。要人の旅行ではなかったから、フィリップス社の幹部にも会わなかった。そのときの私は無名の一小企業の代表者にすぎなかったのだ。

しかしその後の四十年間に、この小さな国に育った二つの企業ソニーとフィリップスは、共通の設計基準の下に共同して小型オーディオカセットから、最近の画期的開発であるコンパクトディスク（デジタル・オーディオディスク）に至るまで、さまざまな分野で協力し合ってきた。・・・」

英語という壁に何度もぶつかったときに繰り返し読み返した箇所である。もちろん私は技術畑の人間ではない。しかし、このときの盛田氏の感情が、英語というものに圧倒され、自分の小ささを思う敗北感が手に取るように判った。そして同時に日本人の我々にも、もしかしたらできるかもしれないという言葉は、私にとって、ほとんど唯一の救いに近かった。

全身全霊かけてだしたトフルの253も、これでは不十分だとアメリカの大学院から言われた。体にも精神にも限界の兆しがあった。これ以上どうすればいいのか。パンドラの箱のように「希望」という言葉だけを信じて努力することがそんなにいけないことなのか。神というものがこの世に存在するなら、お前の努力はまだ足りないと、更なる試練を、一体どこまで課そうというのか。

私の心は不安と孤独で一杯だった。

この一年後に、満開のチューリップと、のどかな田園風景の中で、私はアイントフォーヘンのフィリップスの工場を眺めていた。ミラノの私の家にはフィリップスのカセットレコーダーがある。この状況を一年前に一体どうして信じることができたのだろうか？

オランダ紀行 2005

ユキーナ・富塚・サントス

どういうわけか、このフィリップスのレコーダーから今流れているのは和田アキコ「あの鐘を鳴らすのはあなた」であった。つまづいて、傷ついて、泣き叫んでも、さわやかな希望のにおいを信じて良かったと、今はしみじみ思っている。

黙々と努力を続けている無数の人へ、街は今、眠りの中である。どうかあなた自身が鐘を鳴らす日が来ると、今日は疲れた旅人も生まれ変わって歩き出す日が来ると、信じて努力を止めないで欲しい・・・

これでオランダ紀行を終る。